

〔青木美智男先生追悼〕

青木美智男先生との思い出

矢野建一
(専修大学長)

ご紹介いただきました専修大学長の矢野でございます。九月に就任いたしましたので、まだ二ヶ月のほやほやでございます。どうぞ宜しくお願い申し上げます。本日は青木さんの「思い出」の会にこのように大勢の方々にご参集頂きまことにありがとうございます。

私も歴史学科のメンバーのひとりでございます。青木さんを専修大学にお招きした時のカリキュラム委員でしたので、招聘のために裏で「暗躍」したもののひとりです。専修大学の近世史は設立当時が林基先生、そのあとが辻達也先生でした。一代と二代とでだいぶ学風が違います。それぞれ魅力的な先生方でしたが、この学風の違いをどう考えるか、ずいぶんと議論を重ねました。最終的には全会一致で青木さんをお招きすることになりました。青木さんのお宅に電話をして、是非、東京で会ってほしい、とお願ひし、JR高田馬場駅の近くにあつて、早稲田大学の近世史の方たちがよくたむろしていた飲み屋さん「ハナフク」でお会いすることになりました。ところが、その日に私どもの同僚のひとりが体調を崩し、急いで後期から非常勤の方をお願いしなければならなくなりました。

非常勤をお引き受け下さった先生と小田急線登戸駅で待ち合わせ、関係書類をお渡しする約束をしましたが、間の悪い時には悪い事が重なるもので、田園都市線で人身事故が発生し、その関係で一時間半くらい遅れてしまいました。青木さんとの約束の時間はとうに過ぎてしまっていました。携帯電話など無い時代のことです。きっと青木さんは怒って帰ってしまっただろうなと思って駆けつけましたところ、なんと待っていて下さいました。あの時、青木さんがお帰りになっておられたら、専修大学の一〇年間、その後大学の歴史の編纂等でご活躍された歴史はなかったなという風に思っています。

青木さんはともかく学生、大学院生をこよなく愛して下さいました。私が最初に言われたのは、学生・院生を率いて学外でゼミ合宿や調査に出かけるのに引率責任者が下見をしないとは何事だ、ということでした。これまで大学のセミナーハウスで実施するケースが多く、勝手知ったる場所でしたので、あまり注意されてはいませんが、ご自身がカリキュラム委員になられた時は、ちゃんと下見をし、管理人にも菓子折りを持って挨拶をされていました。とにかく学生たちの安全を第一に考えられていたように思います。

大学院につきましては、学科における研究と教育充実の観点から、より多くの志願者を確保すべきだと主張されていました。このために青木さんは大学院の学費を引き下げるべきだとの提案をされていました。私も一般論として賛成しましたが、このような「価格破壊」が大学院委員会でもや通るとは思っていませんでした。しかし、獅子頭みたいな怖い顔（失礼）で大学院の委員たちを「恫喝」したのでしょいか、なんと承認されました。また私立大学戦略的研究基盤形成支援事業にも積極的に取り組まれ、それまで「宝の持ち腐れ」状態にあったベルンシュタイン文庫の研究と国内外への公開に主導的な役割を果たして頂きました。近世史に限らず、このなかで多くの若手研究者が育っていました。

私も個人的には青木さんに変親しくさせて頂きました。今回の事故（あえて事故と申し上げますが）、は、多忙ゆえの出来事だと思っています。今年の一月に仙台でシンポジウムがあつてお会いをしました。その時に座長を務めておられたが、いつになく滑舌が悪いなと感じました。そこでその晩の懇親会の時に、青木さん歯を治してください、歯がちゃんと整備されているかどうかは、その人の知的水準に比例するそうですよ、と嫌味を言いました。「わかつてる、煩い」と言っていましたけれども、あの時ちゃんと歯を治して下されば、今回の事故はなかったのではないかと思うとかえすがえすも残念でなりません。

青木さんには、専修大学はさまざまな方面でご尽力を頂きました。定年退職後も専修大学一三〇周年事業の一環である大学史の編纂を主導して頂きました。しかし青木さんがなにより心血を注がれた大学院、大学院生、歴史学科の学生たちも着実に育っているように見受けられます。

心よりご冥福をお祈り申し上げますとともに、今後とも泉下で専修大学のこと、院生・学生たちのことを見守って下さい、とお願いして、簡単ですが挨拶いたします。